盆の庭入とバンバ踊り

（別府市天間地区）

松岡　実

はじめに

大分県宇佐郡安心院町及び院内町を中心に、速見郡日出町、別府市、大分郡由布院町（旧速見郡）の一部に、古くから盆の庭入り、またシカシカと呼ばれる盆行事が行なわれてきた。

この行事は、はじめ安心院盆地を中心に発祥して、しだいにその周辺地区にまで及んで行ったものと思われるが、現在では周辺地区にわずかに残っていて、発祥地である安心院、院内地方ではそのかたちが崩れて、すでに忘れ去られようとしている。

その行事の大要をしめせば、盆の十三日の夕方、地区の青年達が地区内の寺（宇佐地方では小規模の真宗寺院が多く、ところによると一地区に二、三ケ寺が密集する所もある）に集まり、道楽に合わせ念仏を唱えながら初盆の家に行き、庭にカサボコを立て、念仏申し、和讃、サンガシラ、シカシカの順で供養をしたあと、バンバ踊をおどって行事を終り、そのあと初めて女性を参加させて普通の盆踊りを行なうというもので、おそらく盆踊り祖型を残しているものではないかと言われている。中でも別府市の北西端の秘境天間地区に伝承されるものは、現在では最も古いかたちをそのまま残し、貴重な民俗資料として高く評価されている。

天間地区は今では別府市に編入されたが、昭和三一年に合併するまでは、大分県速見郡南端村の一部で、宇佐平野を貫流する駅館川の上流に位置する。宇佐郡山中部の安心院盆地と同じ経済圏、文化圏に属する一山村地区であった。交通圏も現在の県道別府　院内線が開通する

までは、日豊本線豊前善光寺駅から豊州鉄道で円座駅まで行き、それからバスで津房村須崎終点下車、後は徒歩という不便さであった。海抜三・四〇〇米の小盆地に五七戸が三つの小集落をつくっている。最も大きな天間地区は、旧天領で三九戸、同地区内の正円寺（浄土真宗）の門徒である。桐小野地区は八戸で旧日出藩木下領、速見郡山香町法照寺（浄土真宗）の門徒であり、さらに小手吹は七戸で旧日出領だが、寺は日出町西教寺（浄土真宗）の門徒というきわめて複雑な宗教構成である。（戸数などは昭和五八年のもの）　庭入の行事はこうした旧所属藩や門徒寺院には一切おかまいなしに行なわれているが、これは下流の安心院地方や周辺他地区もほぼ同様である。

さて、行事は月遅れ盆の新暦八月十三日に行なわれるが、午後八時、天間地区のほゞ中央にある正円寺に集合した地区の人達二十、三十人がカサボコを中心に境内に整列し、住職がお経をあげる間、黙祷している。お経が終わるとカサボコを中心にして初盆の家へ「道中行列」を行なうが、その行列順序は、若（チョウチン持一人）タイコ（タイコ持二人にタタキ手一人）、カサボコ（二人で持つ）、笛（六人）、カネ（六人）の順序で進み、あとは二列に並んでお供につく。勿論この行は男ばかりである。

庭入りの　バンバ踊り

こうして初盆の家の庭の入口につくと、まず、「道ばやし（ギオンバヤシ）」を二回　一回　停止　二回という順序で奏しながら、行列は庭を右廻りに二回まわりカサボコを正面中央に立てる。

初盆の家では庭に面した座敷に位牌を供え、家族や親族一同がその両側に座って行列を迎えるのである。

カサボコを正面中央に、タイコを向って右側に据え、行列はカサボコを先頭にして整列すると、公民館長がまずシカシカの巻物を位牌の前に供えて、いよいよ庭入りの行事が始まるのである。

最初を「念仏申し」と言い

（頭）　ナームーアーミーダー

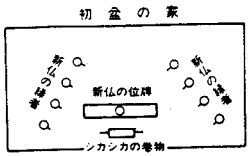
（全員）　ナムーナームーアーミーダー

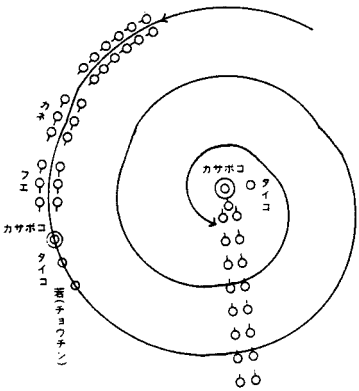
（タイコ）ドン

の調子で数回唱える。

次に「和讃」であるが、（頭）が上の句を出し、全員が下の句を流す。和讃は死んだ人の年令により次の六種類に別れている。

庭入り順序図





児童和讃　（十才までの子供の新仏）

賽の河原ともうせしは　娑婆と冥途の境なり
一つや二つや三つや四つ　十より内の幼子が
賽の河原に集まりて　もみじの様なる手をもちて
真砂を拾うて塔をつむ　一丈つんでは父のため
二丈つんでは母のため　三丈つんでは
教師兄弟我ためと
やがて日暮となりぬれば　地獄の鬼が現われて
つんだる塔をつきこわし　東にむいては父恋し

西にむいては母恋し　恋し恋しと泣く聲が
谷のおだま響かれて　父が呼ぶかと心得て
母が呼ぶかと心得て　谷のおだまに来てみれば
父という字があらばこそ　母という字は更になし
あらふしぎやここに又　地蔵菩薩か現われて
子供よ何を悲しむか　尋ねる父母は娑婆にあり
冥途の父母は我ぞかし　一つ所に呼び集め
衣の袖を振り着せて　げんによあれと廻句する

花田和讃　（未婚の男女の新仏）

七日七日が七・七日　四十九日にあたる日が
明日は花田の寺参り　寺の書縁に腰をかけ
花園の花を眺むれば　開きし花は散りもせず
蕾の花の散るを見て　さぞやわが子もあの如し

六字和讃　（六十五才までの女性の新仏）

帰命頂礼天竺の　びらしゃら川と申せしは
水はなくして船浮かず　船は白金櫓は黄金
六字名号を帆に巻いて　諸縁の諸仏が乗り客で
地蔵菩薩が船頭して　西へ西へと急がるる

善光寺和讃　（六十五才までの男性の新仏）

これより空の天篁の　学界長者の御建立
守屋の大臣悪事して　あみだを池に沈めたり
その後本田の善光が　池より阿弥陀を守りあげ
昼は善光守り申し　夜はあみだが守りつつ
三夜三日と言う内に　やがて信濃に着きにけり

都和讃　（六十五以上の女性の新仏）

そもそも都のかたわらに　類子と申せし女人あり
女人助かる道はなし　みだの浄土に願をかけ
助けたまえと弥陀如来

箱根和讃　（六十五以上の男性の新仏）

箱根のふもとの夫婦石　一つ塔にはほととぎす
一つの塔の其の上に　弥陀の三仏が立ち給う

以上の和讃が終わると次いで「サンガシラ」に移る。
サンガシラは、

（頭）　ナームーアーミーダー
（全員）　ナームナームーアーミーダー
を五回くり反す。そのあと、
（タイコ）ドドンードン
と打つ。

次いで「シカシカ」を公民館長、または役員が声高く読みあげるが、シカシカとは、一くぎり毎に参加者全員が、「シカリ」「シカリ」
と相槌をうつので、シカシカと呼ぶと言われているが、天間地区は、現在はこの相槌が省略されているようである。この言葉「シカリ、シカリ」が本来の姿なので、これは是非とも復活して貰いたいものである。

シカシカの内容は

東西　東西　御静まりたまう　誠に世はういつれ有為変転とは申せども　月に村雲　花に風　花は根に帰し鳥は古巣に帰れども　帰らぬは死出の旅　ここに「何某」永々御病気の処御養生御叶いなく　遂に御死去遊ばされ　御親類様方の御なげきは浅からず　ここに盂蘭盆教の謂れあり　昔釈迦の御弟子目蓮尊者の御母公永く病の床に臥し給い　千里の名医集りて　医術を尽し給へ共　耆婆扁鵲も及ばねば　遂に御死去遊ばされる前生の罪の深くして　阿鼻地獄に墜罪し給う　其時目蓮尊者は大きに御なげきかなしみ給い　何卒母のくるしみ救わんものをと　雨を車軸に降らされど　同じく火炎と燃え上る　是れ我力及ばじと　御師匠釈迦の御元に寄り　何卒母のくるしみ助かる御法あるならば教え給えとありければ　如来答えて曰く　前生の罪の重ければ　汝が力及ぶ所にあらず　高さ九尺に棚を掛け　三界萬霊の位牌を供え　数多の僧を呼び集め　百七日の御恩講を勤めなば　其の功力にや　地獄あがりを致さんものをと教え給　はば其儘に　高さ九尺の棚を架け三界萬霊の位牌を供え　卯月中の五日より　文月中の五日迄　一万部の法華供養とや　其の効力にや地獄あがりを遊され　当月中の五日とや　西方弥陀の浄土に御往生遊ばせられ候　其時　目蓮尊者大きに踊らせ給う　其楽を茲に当村老　若男女集まりて　バン

バ踊を取組候　是れ伝来の遊びにあらず　歌う舞ふも
法の道　見る人聞く人ともに蓮のうてなに遊ばんもの
をとや　笛の歌口太鼓の音占め　三線の糸を調べ　さ
あさ　おんどを始めたり　始めたり

この〃始めたり、始めたり〃で「バンバ踊り」が始まるが、拍子は太鼓を用い、庭入りに参加し整列していた男子青年団のみが、カサボコを中心に輪をつくって踊るのである。踊り子が、

「アラーエイエイ、コラ、バンバ踊りが始まるころよ
　アー、婆もみてみよ孫子を連れて」

とかけ声をかけ、口説きが始まる。

（頭）　宇佐に参るよりゃお関に参れ
（全員）アーお関は作神サイサイ作がよい
（頭）　宇佐の石段百とは言えど
（全員）百はござらぬヤレ九十九段
（頭）　宇佐のえの実は美事なものよ
（全員）えの実ゃならずにヤレ葉がしげる

バンバ踊り自体は手足をただ打ちふるようなきわめて簡単素朴な踊りであるが、二廻り位でおわり、いわゆる庭入りとバンバ踊りの行事はこれで一応終了するのである。

そのあと始めて女性と子供が踊りに加わり普通の盆踊りに移るが、盆踊りも昔から順番がきめられており、実にてぎわよくスムーズに次々と踊りが移って行くのは珍しい。

盆踊りの最初は「三つ拍子」と呼ばれる段物である。おつや口説、那須の与一、鈴木主水、四谷怪談などが次々と口説かれ、

「サンサ灯台オンソレ乍ら　しばし間は口説いてみま
　しょ」

または、

「汽車は出てゆく煙は残る　残る煙がヤレシャクノの
　種　山は焼けても山鳥は立たぬ　立たぬ筈だよ吾が

子を捨てて　咲いた桜になぜ駒つなぐ　駒が勇めば
花が散る」

などが、先ず踊り始めに口説くのがその特徴である。

ついで「マッカセ」であるが、これは一人で二曲ぐらいを口説いて次々交替、主としておばあさんなどが高い調子の美声を聞かせる。

「マッカセ　ヨイヤナサ　シバラクユロカー　マカシャ
踊りで品がよい」

で始め、即興的な歌詞で多少エロチックな歌もはいる。口説のあとが出なくなると、「レソ」に移るが、レソへと変る合図は、

「レソは良いかよ　レソどもやるか　コラサイノサ
レソはナーヨイショ　踊りよじや品が良い　ヤレヤ
レソーヤトヤンソレサー」

であり、口説は、

○タンダ　ダント流れる水は別府芸者の化粧の水
○イヤジャ　イヤジャと畑のイモが　かぶりふりふり
子ができた
○姉と妹が揃いの浴衣　どれが姉やら妹やら
○梅と桜を両手でもちて　どれが梅やら桜やら
○あゆは瀬に住む鳥は木の上に　人は情けの下に住む

などが多く歌われる。

次に「七つ拍子」であるが、段物としてはおつや口説があり、即興物も多い。七つ拍子には、

「おせ　おせ　七つも八つも　サノヨイヨイ　おせば
コラ都がヤレ近くなる」

で移る。

次は「シキダ」で、

「シキダ通れば雨ふりかかるよ　コリャ　かかるよ
妻子が気にかかるヨ」

で移り、口説は即興ものである。

ここで女性や子供達が再び踊りの輪から出て、男子のみで「ケダシ」がはじまる。

「サアー　サアー　これから早いが良かろ　アラエッサー　ミンナどなたもケダシておくれ　ヤレヤレソー」

に始まり、非常にテンポが早く、南洋やアフリカの土人踊りにも似た乱調子の踊りである。足を力強く前にけだすのが特徴で、手の位置も高い。口説は即興口説で、ただ踊りの調子をとるために歌っているにすぎない。踊る青年も見物の女性も次第に熱狂的になり、まるで踊り狂っているような光景が展開する。

ケダシが終わると、笛、太鼓、道ばやし、祇園ばやしを各一回はやし行列をととのえ、門口から出て次の初盆の家に行くのである。初盆の多い年には十三日だけで終わらないで十四日まで行なうことがある。

また初盆のない年は十四日に正円寺で、施餓鬼供養として庭入りを行なっているが、この時は和讃を全部唱えている。

なお、初盆の家では、庭入りの参加の青年を座敷に上げ、お膳に直らせ、酒、料理を出して接待するほか、女の踊り子や見物人には、夜食として味噌漬をまぜたニギリメシを二三個づつ出し、土産として、口説手（太夫さんという）に蛇の目傘、踊り子に手拭、見物人にはウチワを出すのがシキタリであったが、現在では全員ににギリメシとウチワを出す程度に簡略化されている。

以上、天間の庭入り行事を大きく別けると、まず念仏と和讃を唱え、つぎに盆供養のいわれと霊鎮めのためバンバ踊りを行なうことを述べ（シカシカ）た後、比較的テンポのゆるいバンバ踊りをおどり、普通の盆踊りを奉納して、最後にまた手をふり、足を踏むテンポの早い原始的なケダシで終わるという五つの段階をとっている。

この中で、バンバ踊りとケダシ踊りが、とくに死者の霊鎮め供養の要素をもっているように感じられるのである。

安心院盆地とその周辺に古くから伝承されてきた盆の

天間のカサボコ

庭入行事の中で、最も古い形式をそのまま伝承している天間の庭入り行事は、貴重な文化遺産として、市または県の無形文化財として永久に保存すべき価値があることをここに付記して、保存会結成等行政の積極的な取り組みを強く要望したい。

編者註

天間地区の盆行事は　無形文化財として特に注目に値する行事である、と考えられる。多数の人々に理解して頂くために、昭和五九年三月、別府市教育委員会発行の「べっぷの文化財・第一五号」に松岡実氏が執筆されたものを転載させて頂いた。

なお、松岡実氏が昭和四七年に、大正大学仏教民族学会の会誌「仏教と民族」に発表された『盆の庭入りとバンバ踊り』のなかで番場時衆について触れられているのでお許しをえて要約しておきたい。

宇佐・安心院地方と時衆聖（ひじり）

庭入り行事の中心となるのは、盆供養の由来を申し述べるシカシカと、霊鎮めのために行なうバンバ踊りである。バンバ踊りの原型は安心院町深見地区のシカシカの中に、

頭に蓮の葉を冠り　扇を西に差上げて　衣の袖を打ち振って　バンババンバと踊らせ給う

という一節があるが、頭の冠りもの、扇子踊、熱狂的な乱舞と優雅な舞の交錯など、バンバ踊は念仏踊りのすべてを含んでいるようであるので、おそらくこの形が原型

であろう。

踊念仏をひろめた時衆教団は、江戸時代初期に消え失せて、真宗両派及び浄土宗に吸収された。時衆最盛期の宗教的遺風が、現在なお豊前門徒と呼ばれる真宗過密地帯の中で宗派にかかわりなく行なわれているのが、盆の庭入り行事であろうと推論される。

宇佐地方の時衆聖の中心は、日本三善光寺の一と称されている豊前善光寺であった。豊前善光寺は、村上天皇の天徳二年（九五六）、光勝空也上人の開基と伝え、初め天台宗より時衆、さらに江戸初期に浄土宗に転宗して現在に至っている。空也上人が一光三尊の尊像を護持して九州に下り、宇佐八幡の神勅によって現在の地に一宇を建立したと伝えられている。善光寺の末寺や末庵は宇佐郡下に六十か寺に及び、時衆聖の根拠地であったといわれる。豊前から豊後にまでも活躍していたと思われる時衆聖も、豊前善光寺の転宗で姿を消してしまった。

時衆聖が大衆の結縁を得る道は、「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」のお札と、空也上人によって創められ、一遍上人によって広められたと伝える踊念仏である。

豊前平野や安心院盆地という経済的背景をもつ宇佐、安心院の地に時衆の活躍が盛んにとなり、大衆の間に念仏思想が行き渡った後に、時勢に適合した真宗教団が進出して九州御坊東西別院が成立した。豊前善光寺は止むなく浄土宗に転宗して余命をつないだが、大衆の生活に密着し根強く残っていた踊念仏は、真宗教団につかず離れずの姿で伝承温存され、次第に盆の庭入り行事として固定化していったものと推定される。

庭入り行事については、

一遍聖絵の「上人を講じて三日三夜の供養をのべ」は「シカシカ」に当たり、「念仏申したが」の部分は「念仏申しや和讃」、また「数百人の者が踊りまわってついに板敷をふみおとした」の部分はバンバ踊りに相当すると考えれば、時衆聖の影響を受けていることが歴然としよう。最も重要な部分「頭をふり足をあげて踊る」という動作は、庭入り行事の霊鎮めにあたる「バンバ踊」や「ケダシ踊」そっくりの表現である。真宗は時衆の最も時衆らしい行儀、踊念仏を庭入りという形で温存しながら、実に巧妙に時衆勢力を蚕食し尽くしたのであろう。

バンバ時衆とバンバ踊

初期時衆は十派に別れて活躍したといわれるが、九州に最も関係の深いのは、開祖一遍上人のひきいる藤沢時衆と一向派、天童派の祖である一向上人の番場時衆に限られるようである。

一遍の九州入りは生涯通して二度である。聖達上人のもとで修業時代を送ったのが一度目で。二度目は九州各地の行脚の途中で豊後を訪れ、大友頼泰の帰依を受け、支配階級に受け入れられた。

しかし、県下に多く残されている時衆系の板碑は、名字すらもたぬ大衆のものが多い。数か月滞在して支配階層の帰依を受けたに過ぎない一遍の信仰が、急激に一般大衆の間に浸透していったのだろうか。一遍の他にもっと早くから大衆を基盤とした時衆の信仰集団があったのではないだろうか。それは、一遍のかげにかくれた民衆仏教の指導者ともいうべき、番場時衆の祖一向上人である。

一向上人は筑後の人で浄土の法を修め、名を一向と改めて文永十年遊行をはじめた。翌年夏大隅正八幡に詣でて、秋、肥後を過ぎて宇佐八幡に詣でて、一遍に先んじて西国の教化に尽力した。弘安七年、近江の国番場に蓮華寺を建て、番場時衆と称して踊念仏を教義の中心とする、一遍上人の藤沢時衆の中でも別派的存在であった。

一向上人は大隅正八幡と宇佐八幡に詣で、踊念仏を行儀の中心とし、八幡信仰を母体として主に西日本を教化の対象として活躍した時衆聖である。それに対して一遍上人の藤沢派時衆が熊野権現をその信仰の母体として、関東、北陸、中部、近畿に勢力を張ったのとまったく対照的である。

日本の辺境の地に遊行の旅を続けた番場時衆は、初期には日本の中央部で活躍した一遍上人とその直系の藤沢時衆のかげにかくれ、末期においては浄土宗のなかに埋没し去ったのである。

一向上人の生誕の地九州に番場時衆の名を冠したバンバ踊りが今なお残されていることは貴重でであり、実質的にはすでに亡び去った中世の時衆教団研究の一つの足がかりでもあろう。

（文責　入江）